

「ガラスの蓋に顔があったっていいじゃないか」と言った岡本太郎さんみたいに、つぶやいてみたくなる。「ラーメンカップにラジオが付いてたっていいじゃないか」「ビール缶にラジオが付いてたっていいじゃないか」……。

兵庫県加古川市でパソコンスク

ールを開く塚原英成さん(51)のコレクションは「B級ラジオ」。ラーメンカップ型のラジオに、めんはもちろん入っていない。「脂肪たっぷり・かなりの塩味、土俵入りラーメン」とあり、力士の絵が描かれている。お湯を入れると3分で壊れます、との注記も。

「B級品だけにラジオとしての音質も悲しいものがあります」

ラーメンの隣には、消臭スプレーの缶。天才バカボンの「ウナギイヌ」と招き猫をかけたあわせたようなヘンな動物キアラもある。その横では往年の名DJ、ロイ・ジェームスさんを模した人形が口を

パクパク。全部、ラジオだ。

写真で見るとガラクタの山に見えるけれど(失礼)、塚原さんはこうしたB級ラジオを約150種類集めた。その多くは中国製で、日本語の説明書きも首をひねられるものが多い。

「ネットオークションで安く手に入れたり、人からもったりすることが多いです。ジュースの1号ボトルを25本飲んで、ようやく償費で当てたものもあります」B級品を集めているのはこの2年ほどだが、ラジオ趣味歴は長く、小学5年のころには工作に夢中になった。ビートルズのレコードがはじめて日本で発売された年で、トランジスタラジオはまだ子供に手の届く値段ではなかった。

「海の向こうの音楽はラジオでしか聞けなかった。とくにジャズに夢中になりました。あのころは小さなラジオだが、世界につながる扉だったんです」

それ以来40年、ラジオの価値の

下がりがっふりは、いまや携帯電話の遊び道具として使われているカメラと比べても、より急激だ。

「古いメディアの行く末、ものあわれに心ひかれます」

塚原さんは、駅頭にセットされた自作機器のスイッチを入れた。インターネットで受信した海外の放送をAM電波で室内に飛ばす機器という。たちまち、どのラジオからも軽快なモダンジャズが流れ出す。ガラクタたちに急に生命が吹き込まれたかのような光景は、映画「トイ・ストーリー」のワンシーンを思い出させた。

「お祭りの夜店で売っているようなモノばかりだけど、ちゃんと、生きてる、のがイイんですよ。地震のときに情報源として立派に役立ちますし。金魚すくい100円で買った金魚でも、粗末にしないで大事に水槽で育ててあげるとかいいでしょう。それに似たいとおしきがあるんですよ」

(文・宇都宮健太郎)

## B級ラジオ 一斉にうたえ、玩具たち



かぶっている帽子にも、もちろんラジオがついている。塚原さんのサイトは <http://www.kn.org/b9radio/>＝嵐影・川原崎茂

### 館長アラマタの講評



#### わたしからも、一つ提案!

ラジオといえは放送内容や音質などソフト部分が重要だった。だが、現在では部品の小型軽量化で番組ソフトのみならず、本体ボディまでさまざまな物品へ変身可能になった。ゴルフボール、たばこ、牛乳パック、クレジットカー

ドサイズのラジオもある。しかも多機能で、時計や万歩計までついている。塚原さんのサイトで自作ラジオを募集しているの、ご提案。テレビをつけようとしてリモコンを押したら、いきなりリモコン自体が鳴り出す「テレビリモコン擬態型ラジオ」いかが? (作家・荒俣宏)